(2) 軽い仕事や運動をするときには大した症状もないが，少し激しいことをすると，動悸，呼吸困難，その他の苦痛や症状がめだつ。
(3) 静かにしているときは苦痛がないが，少し動くとすぐ症状があらわれ仕事や運動ができない。
(4) 安静にしていても症状があり，ほとんど動くことができない。

4. 考 察

大動脈縮窄症の術後は，全例において自覚症状が軽減し，長年月の間に再び悪化するものはみられなかった。不整脈その他の出現もみられない。本症の術後長期経過は概して良好であると考えられる。

大動脈縮窄症手術症例の長期予後

東京大学 胸部外科 三 枝 正 裕

当科で1956年より1978年未までに isthmus 型の先天性大動脈縮窄症の手術を受けた症例は29例である。うち早期死亡をとげた7例を除く22例(手術時平均年令19才；3～45才）について，平均9年10月の経過観察を行っている。

合併心疾患の有無により本症を三群に分けてみると〔表1〕，Ⅰ群（大動脈縮窄症のみ）17例中2例(11.8%)死亡，Ⅱ群(VSD 合併）4例中1例（25%）死亡，Ⅲ群（その他の重症心疾患を合併）の1例は，術後12年の現在 AR，ASD を残して存命中である。結局，22例中3例（13.6%）を経過観察中に失った。死因をみると，2例は移植グラフト吻合部動脈瘤の破裂のため，各々術後1月半，10年半に失った。他の1例は，ナイロン製グラフトの屈折及びグラフト内血栓症に因り術後1年後に失った。

生存19症例は，ほゞ正常な日常生活を営んでいる。しかし，更に詳細に症例を分析してみた結果，見出された問題は次の4つに集約される。

(1) 合併心疾患の処理法
(2) 移植グラフトの運命
(3) 狭窄の再発
(4) 高血圧症の持続

(1) 合併心疾患は，一期的根治術で1症例を早期死亡させて以降，原則として，二期的に治療することとしており，Ⅱ，Ⅲ群5例中3例は，二期的に合併 VSD を根治，他の2例は待機中である。

(2) 移植グラフトの運命；上述の如く遠隔死亡例の全ては，移植グラフトに関係したもので，うち2例は吻合部瘤破裂で失っている。ナイロングラフトの屈折，血栓形成で失った1例は初期の症例である。

表 1 FOLLOWUP RESULT

GROUP	NO.	MEAN FOLLOWUP MONTHS	DEATH	SURVIVALS
Ⅰ	17	125.5	2 (11.8%)	15
Ⅱ	4	116.3	1 (25%)	3
Ⅲ	1	141.	0	1
TOTAL	22	118.	3 (13.6%)	19

表 2

(a)

HYPERTENSION
(FOLLOWUP MORE THAN 4 YRS.)

PREOP.	POSTOP.
HYPERTENSION 14 (93.3%)	H：5 (35.7%) N：9 (64.3%)
NORMOTENSION 1 (6.7%)	N：1 (100%) H：0 (0%)

H：HYPERTENSION
N：NORMOTENSION

(b)

HYPERTENSION
AND OPERATIVE PROCEDURES
(FOLLOW UP MORE THAN 4 YRS.)

PROCEDURE	H→H	H→N	N→N
GRAFTING 10	3 (30%)	7 (70%)	0
PATCH 2	1 (50%)	1 (50%)	0
BLALOCK-PARK 2	1 (50%)	1 (50%)	0
END TO END 1	0 (0%)	0 (0%)	1

(3) 狭窄の再発は，7才時に Blalock-Park 術を行い，8才で VSD を閉鎖したⅡ群の1症例でみられ，11年後の現在上下肢間に 30 mmHg の圧差を認めている。成長に伴う吻合孔の相対的な狭小化と考えられる。

著者らの1人（進藤）は，既に再狭窄の発生には，初回手術時年令，吻合術式，吻合孔の大きさが重要な因子として関与することを明らかにしている。再狭窄は吻合部の成長が，大動脈の他部の成長に比し著しく遅いか或は全く成長が認められないことに困ると考えられる。

(4) 4年以上経過観察を行った15症例での上肢の高血圧症に関する分析〔表2〕では，14例（93.5%）に術前から高血圧が認められた。うち9例（64.3%）は縮窄手術により高血圧は消退した。5例（35.7%）の高血圧症残存例のうち，1例は，パッチによる狭窄部拡大術施行例，1例は，Blalock-Park 術施行例であった。他の3例は狭窄切除，グラフト移植を行った症例で2例は，術直後高血圧が消退したが，術後3年経過した頃より再び高血圧症が認められるようになった症例である。グラフトの太さが相対的に小さくなったものと考えられる。残りの1例はグラフト移植後でも高血圧が消退しなかった症例で，これは高血圧症の本態に関わる興味ある1症例と考えられる。今後の精査を予定している。

（まとめ）

当科で手術を行った大動脈縮窄症長期生存22症例の経過を観察し分析を行った。

3例（11.8%）の遠隔死亡を認めた。いずれも移植グラフトに関連した死亡であった。

予後の問題点を4つに集約し，(1) 合併心疾患の処理法，(2) 移植グラフトの運命，(3) 狭窄の再発，(4) 高血圧症の推移について論じた。

先天性心疾患手術後の長期予後調査と管理基準に関する研究

——大血管転位症の術後予後調査について——

東北大学胸部外科　堀　内　藤　吾

I. 対象ならびに方法

本調査の対象は，昭和51年12月までに東北大学で根治手術の行われた症例のうち生存15例と同じく秋田大学の1例，計16例である。調査は，厚生省班会議作成の予後調査表を用いた。アンケート方式によった。アンケート依頼は16名，応答者も16名で回収率は 100% であった（表1）。

II. 結　　果（表2）

現在の生活状況について(表2－Ⅰ)。

幼児（該当者8名）の調査結果では，術後に発育のよくなったもの5名，変らなかったもの2名，悪くなったものはなく，記入しなかったもの1名であった。知能の発育については，よくなったもの3名，普通であるもの4名，記入しなかったもの1名であった。同じ年頃の普通の子供と較らべて，同程度に遊んでいるもの6名，友だちより疲れやすいもの2名であった。運動能力については，手術前にくらべて増加したもの7名，変らないものはなく，記入しなかったものは1名であった。チアノーゼは8名全員が消失した。

次に児童（該当者8名）の調査結果では，手術後身体の発育がよくなったもの6名，手術前と変らないもの2名，悪くなったものはなかった。手術後精神的性格的に明るくなったもの1名，活発になったもの4名，あまり変らなかったもの3名，悪くなったものなしであった。現在通学している学校は全員が小学校で，うち1名が養護学校，1名が盲学校であった。体育の時間は，普通にやっているもの4名，激しいのは休むもの3名記入なし1名であった。

現在の体調について(表2－Ⅱ)。

表 1　アンケート調査結果

調　査　対　象	16人
回　収　数	16人
回　収　率	100%

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

当科で 1956 年より 1978 年未までに isthmus 型の先天性大動脈縮窄症の手術を受けた症例は 29 例である。うち早期死亡をとげた 7 例を除く 22 例(手術時平均年令 19 才;3〜45 才)について,平均 9 年 10 月の経過観察を行っている。